

# 肢体に障害があるN君とU及びY教諭との関わりから

岩 塚 政 司

(岐阜県立岐阜希望が丘養護学校)

## 1 肢体不自由養護学校の現状

肢体不自由養護学校では、重複障害学級在籍児の割合が増え、児童生徒の障害の重度化・重複化、多様化が進んでいる。また、特に病院機能をもった肢体不自由児施設に併設された養護学校では、通常学級においても下学年適用の指導が必要であるものや、手術・治療等に関わり、肢体不自由児施設で学ぶものも少なくなく、学習状況にはかなりの差がある。

また、肢体不自由のために活動に時間がかかったり生活上の制約を受けることが多く、体験の共有が少なくなりがちである。そのため、共通の経験の上に立った関わりが難しい場合が多く、教師が意識的に共通経験の場を設定していく努力が必要である。

K養護学校は、肢体不自由児施設「K学園」に併設された養護学校であり、数年前から学齢児措置通園制度が認められたことにより、通園児が増加してきている（現在58%）。また重複障害児の占める割合が80%を越え、障害が重度化している。このK養護学校の小学部5年生の男児N君と一昨年度、昨年度担任のU教諭、本年度担任のY教諭との関わりについて指導日記及び実践記録を通して考えてみたい。

## 2 N君の実態（U教諭の記録より）

- ・若年性関節リウマチ。3歳で発症。5歳からK学園に入園し、平成9年度にK養護学校へ入学した。入学当時は独歩不能で車椅子の生活をしてきた。1年生の12月頃には、数歩の独歩が可能になったが、その後、再度病状は悪化し車椅子ばかりの生活となった。関節の痛みがひどく、睡眠も十分とれず、生活リズムが整わなかった。
- ・薬の関係で3年生の4月には痛みが軽減してきた。また、電動車椅子を使用することになり、自分で思うように移動できるようになった。
- ・痛みを恐れて、人からからだを触らせない、車椅子から離れられない状態で、活動が限られた。身のまわりのことを人に頼まなければならないが人に触られたくないという葛藤や、手やからだを使う活動はやりたくないという思いや、やれないという決めつけがあり、臆病なところが見られた。
- ・ほぼ学年相応の学習をしている。昆虫や魚などが好きで、いろいろな知識をもっている。
- ・負けずぎらいで臆病なので、負けそうなことはやろうと

しなかったり、途中であきらめてしまったりする。

- ・慣れた人や集団の中では気軽に話せるが、そうでないと、表情は硬く、声が小さくなり、言葉も少なくなる。自分から人に関わっていくことは少ない。

## 3 初めて担任になった頃のN君（H11年度当初のU教諭の記録より）

本児のからだに触ったり、車椅子から降りて参加する活動に本児を誘ったりすることに消極的であった。体育で、プレイルームの遊具を使ってからだを動かす時間があった。本児がきつと「やらない。」と言うだろうと思い、車椅子に乗ったままできるゲートボールを用意していた。しかし、本児は「どちらもやらない。」と言い、みんなの楽しそうな声を聞くのがつらかったのか、教室に戻ってしまった。そんな本児の心の葛藤を新しい担任として受けとめることしかできなかった。

それでも、本児は、通常学級全員で行う体育では、車椅子に乗ったまま、できそうな動きには自分からからだを動かすようになってきた。そこで、みんなでからだを使って活動する時、本児に最初から別の活動を考えるのではなく、みんなと同じ場で本児にどう活動に参加するか考えさせるように誘ってみることにした。しかし、無理には要求しないことにした。また、本児のからだに触れる時は、まず本児が見える位置から声をかけてからにした。

5月に入り、本児はくすぐると全身を震わせて笑うようになり、からだに触られることに少し抵抗がなくなってきた。6月中旬、通常学級全員で、学校近くの公園に出かけた時であった。暑い日だったので、友だちが水辺に下り始めた。いつものように、本児に「N君も下りてみない？」と誘うと、本児は頷いた。そして、この日初めて本児を抱いて水辺に下りることができた。その後、本児は、もう指導者に抱かれてもだいじょうぶだと思ったのか、度々指導者に抱かれるようになった。

## 4 U教諭の感じたN君に対する関わりにくさ

痛みを恐れて体を触らせない、体を使う活動をやりたがらないといった一次障害に関わる面での関わりにくさ、入園・入学後そのような生活を繰り返してきたことによる表情の硬さ、声の小ささや言葉の少なさ、自分から人への関わり方の消極さを最初の印象として受けた。これらに対して関わり方の難しさを感じると同時に、関わり始めて常に関

わり方の選択を迫られてきた。そのことがまた関わりにくさを感じさせることになっていったように思われる。肢体に不自由があると、多かれ少なかれ周りの友達と同じように活動できなかつたりするため、その子その子に応じた活動のメニューが必要になることが多い。そのことは、個に応じた指導という点では児童生徒の満足を引き出せる可能性を持っている。しかしながら、知的に優れておりグループのリーダー的立場にあるN君の場合は、肢体不自由という基本的な障害自体が時々状況によって変化しつつ今を迎えているという経緯もあり、友達と異なったメニューで活動しなくてはならないという不自然さに加えて自分自身の体調との葛藤があるという難しさがあるように思われる。

このようなN君に対して、U教諭は次のような成長への願いをもっていた。(4月の指導日記より)

- ・将来、自分の病識を一層深めながら、病気とうまく付き合い、病気に負けない気持ちをもって、積極的に自分の人生を歩んでほしい。
- ・いろいろな活動にできるだけ自分でやるための工夫をしながら、自分の思いを出して精一杯取り組むことや、夢中になれることを見つけることが大切である。そうすることが、生活全体の意欲や、自信をもつことにつながる。
- ・本児の興味や意欲を引き出し、学年相応の学習の力をつけ、豊かな生活ができる力につなげていきたい。

U教諭は、最初はN君に対し、できそうなメニューを準備することで活動への参加を促したが、結果的に集団への参加を困難にしていた。U教諭としてはN君のもつであろう気持ちを考えて取り組もうとしたが、N君の葛藤はU教諭には捉えきれなかったようであった。このような経験から、U教諭は自分自身の目でN君ができそうなメニューを仕組むことがむしろN君にとっては障害をクローズアップして意識させてしまっていることに気付いたようであった。N君にとっては、異なったことに取り組むことより、障害がありながらもいかにして集団の活動に取り組むかが重要であったようである。U教諭は、N君が自分のできるための工夫を一緒に考え援助していくことが願いに近づけるための在り方であると気付いたのではないだろうか。

## 5 1年間を振り返って

U教諭は、N君との1年を振り返って、次のようにまとめている。(H12年3月のU教諭の記録より)

4月、痛みを恐れて人に体を触らせなかった本児が、少しずつまわりの人に心を開き、人からだをまかせたり手を添えてもらう中で活動が広がった。また、一人ではやろうとしないことも、みんなの中で刺激され、自分もやってみようという気持ちももてるようになってきた。好きなことや夢中になれることが増え、手やからだを動かすことが

できたり、物を作りあげたりする楽しさや喜びが、自分にもできるんだという自信につながった。そういったことが、自分の身の回りのこともできるだけ自分でやろうという意欲や自分でやるための工夫をしたりする姿に表れ、生活全体に活発さが見られてきた。しかし、いろいろなことに挑戦していこうという気持ちはもてたが、自分の思い通りにいかなかった時など、落ち込んだり投げやりになったりするので、人との関わりの中で自分や周りを見つめ、自分をコントロールしていくたくましさも育てたい。それが、体調が悪くなった時、自分自身を支え、病気に負けない気持ちをもつことにもつながると考える。そして、本児の生活する力になっていくような教科学習を見極めていくとともに、自分の身の回りのことについては、段階を踏まえてできるだけ自分でやるための方法を本児と一緒に考えていくなど、生活全体を見通した支援をしていきたい。

## 6 関わり方の難しさ(その後のU教諭とN君)

U教諭は、N君との関わりの中で自分で考えさせるために沈黙の時間の大切さに気付いた。N君と関わって2年近く経ったH12年11月のU教諭の指導日記には次のように書かれていた。

1時間目の国語の時間に、学習発表会用の台本を受け取る。早速、自分の台詞に蛍光ペンで印をつけるNとS。Nがすべての場面に登場していることを喜ぶ。台詞も多い。(後でわかったことだが、母親に「主役をやる」と言っているようだ。)それをうらやましがるS。Nがハヤブサ役に加えておじいさん役(声のみの出演)になったことも気にはなっていた。

この時間にあまり深い意味を持たずに、「Nくん一人多くない?」と尋ねてみた。「そんなことない。」とN。・・・

しばらくの間、Nは台本を持ち、私には顔を見せないようにして沈黙。こちらもしばらくSと他の話題を話し、Nには声をかけないでおく。Nは台本を見続けている。みんなの台詞の数を数えているかの様子。この時、きっとNは「おじいさん役を譲る。」と言うだろうと思った。何だかとても押し付けがましいことをしてしまったように思った。せっかくやる気になっているのに、ここではその気持ちを大切にの方がよかったのではないかと後悔した。Sと話しながら、Nにどんな言葉をかけようか考えた。時々、Nの間にはこの沈黙がある。自分の思いどおりに行かなくて投げやりになった時など、Nにじっくり自分の思いを見つめてもらい、自分で気持ちをコントロールしてほしいと思った時などである。そして、それはほとんど有効なことが多い。しかし、今回は、これでよかったのかと後悔しながらこの時間が終わる。

U教諭は、沈黙の時間の大切さと有効性を感じつつも、

自分で考えるきっかけとしての教師の投げかけの難しさを感じ続けていた。

#### 7 N君を取り巻く状況の変化（H13年度当初のY教諭の記録より）

- ・母親の希望があり、今年度より国語、算数、理科、社会については、指導者と1対1の体制となる。（小学校へ通いたいという希望があり、本年度途中の手術によって拘縮している膝が伸びて歩けるようになるという期待を母子ともに抱いている。）
- ・春休みから続いてリウマチの薬を服用していなかったが、リウマチの痛みが始め、再び薬を服用している。なるべく服用させたくないという母親の気持ちから、状態が少しでもよいと服用を次第に減らしたり、やめようとする傾向が見られる。服用を中止する基準はどちらかという母親にあるようで、服用状態が1～2ヶ月で変わりやすい。
- ・病棟のすすめと母親の希望により、K学園近くの塾へ週2回5月より通いだした。
- ・全体的に母親の影響が強いが、N君自身は冷静になって母親の批判をすることがみられる。しかし、一方でまだ、母親に甘えたいという気持ちがあり、精神的な幼さが残っている。
- ・体調が良いときや、見通しを持った目標が持てると、自分で身体の動かし方を工夫し、意欲的に取り組もうとする。半面自分の思い通りにならないと落ち込んだり、投げやりになったりすることがみられる。また、自分の気持ちの表現が時間の経過とともに変わり、一貫しないことがある。

#### 8 Y教諭とN君との出会い（Y教諭の記録より）

始業式での担任発表の折、担任の名が発表されると私はたまたまN君の近くにいたのであるが、それまであまり関わりがなかった私の顔を見て、人見知りしたようなはにかんだ表情で「お願いします」と小さく言ったのが印象的であった。後ほど聞いた話では、男性の先生だと苦手だと思っていたという。男の先生ではなかったけれど、あまり知らない先生でどうしたものかなと思っていたのかもしれない。

日常生活では、自分でできないことは「～してください。」ときちんと頼むことができる。学習の中では5年生らしい物事のとらえ方が感じられた。「人に分かるように説明する」「友だちの意見や考えと比べて、自分の考えを深める」「友だちの思いに気づく」という面はやや弱い。自分で頑張れる所は頑張ろうとする素直さや5年生らしい物事の感じ方がある一方で、少しのことで大変喜んだり、

逆に少しのことで急に落ち込んだりする姿が見られたり、低学年の児童が行うような簡単ないたずらを特定の指導者に仕掛けては反応を喜び、指導者がN君に合わせると大変喜ぶなど幼さが残っているように感じられた。

#### 9 N君に対するY教諭の願い

5年生になって、担任の交代、小学校へのあこがれ、塾通いの始まり、リウマチの病状の変化と手術、母親との接し方等様々な面で状況が変わってきた。Y教諭は、N君の高学年として目標をもって進んでいくという自覚と状況の変化への戸惑いの葛藤を感じつつ次のような成長への願いをもった。（4月の指導日記より）

- ・病気に対する理解を深め、病気との付き合い方を自分なりに見つけていってほしい。そして病気に負けない気持ちを持ち、物事や人に積極的に関わり、前向きに生きる力をつけていってほしい。
  - ・自分の体の状態に気を配りながら、体の状態を周りの人に報告したり、やってほしいことを的確に伝えられるようになってほしい。
  - ・高学年の児童として自覚を持ち、自分のやりたいことを見つけ、自分で判断し、工夫しながら進んで行おうとする力をつけ、生活の主体者となって日々取り組んでいってほしい。
  - ・心の安定を図りながら、自分の気持ちを人に押しついたり、逆に自分の中に閉じこめたりするのではなく、相手にわかるように説明すること。友だちの思いに気づき、自分の気持ちも大切にしながら友だちとどう接したら良いのかを考えていけるようになってほしい。
- また、これらを具現化するために次のような手だてを考えた。

- ・体の調子が良くない時に、指導者がすぐに指示を出すのではなく、自分でどうかなど考える時間をもつ。
- ・行動の先回りをせず、体の使い方を自分で工夫して日常生活ができるようにする。周りの人にやってほしいことについては、具体的に頼めるようにする。
- ・1対1の学習の中では、1時間毎の学習課題の見通しを持たせ、自分で精一杯考えて「わかった」「できた」という満足感を持たせる。自分なりの考えを理由などを付け加えながら説明する機会を多く持つ。
- ・保健室の利用や養護教諭との連携を深めながら、精神的な充足感や心の安定を図る。

Y教諭は、病状の変化や高学年としての自覚等の複雑な状況により心理的に不安定なN君に対し、自分なりの満足感のもてる学習や、体の調子を見ながら自分なりの取り組み方を考える時間的余裕を準備していくことで、病気の状態に振り回されずに、病気を自分なりに受け入れうまく付

き合いながら、生活の主体者になってくれるのではないかと考えたのである。

## 10 Y教諭の指導日記より

前年度まで重複学級を担当し、今年度初めて通常学級を担当した私にとっては、わからないことばかりで、N君が実際にどの程度自分で日常生活ができ、自立して考えていけるのかとにかくN君自身に尋ねながらのスタートであった。

5月から塾通いが週2回始まった。部活動もやりたいと始め、忙しくなる。今日は肩が痛いとか、今日は背中が痛いという訴えが折見られた。

5月22日(火)朝起きたら、両手の甲の関節と左足の甲の部分が痛いという。登校するなり体の状態を話し、話しているうちに泣き出してしまった。肩があがらず、書字をするにも机まで腕があがらない。とりあえず「保健室に行ってみてもらおう」と言い、保健室に行く。「昨夜、靴下がきつくて、寝ているときも足が動かなかった」と言う。どうしようもない痛みと、急にそうってしまったというショックの両方なのだろうと思った。4時間目の音楽。いつも持ったトーンチャイムが重くて鳴らせない。また涙ぐみ、隣にいた仲の良い6年生のI君が心配そうにする。授業のあと、そのことをN君に話すと「(I君は)心配なんかしていない……。心配なんかしてもらわんでいい……。」と言う。普段仲が良く、慕っているI君なので、思いもよらず私は返す言葉を失う。

5月23日(水)訓練参観の折訓練士の先生より勧められた体の弛緩を行おうかと誘ってみる。小さな声で下を向き、「ぼくは頭があればいいんや。体はなくても……。」と言う。一瞬私も思わず沈黙。どう話せばN君に私の言いたいことが伝わるのか言葉を探しながら「N君、あのね体がしっかりしないと集中力がなくなってね、頭も動かないんだよ。」とN君の表情を確かめながらゆっくり話すとN君はしばらく黙る。体はいらないと言いながらも気持ちは揺れていることを感じる。

6月21日(木)から22日(金)まで自然の家で宿泊学習を行う。前日から楽しみでもあり、緊張もし前夜あまり眠れず。しかし自分でたてた「できるだけ自分で着替えをする」という目標は頑張りたいという気持ちがあり、時間をかけながらも自分でやり方を工夫し取り組めた。「先生、ぼくねトイレへ行って一人で全部してきたよ」と言う。初めての場所であり、全部とはどういうことかと思いながら、「どうやってしたのか教えて」と聞くと、具体的に説明してくれた。話を聞きながらびっくりして「すごいね、N君」と感心すると、得意そうであった。

## 11 最近のN君(Y教諭の指導日記から)

最近のN君についてY教諭は次のようにまとめている。

2学期になり、2か月あまりが過ぎた。体の痛みもたまにはあるが安定し、気持ちも落ちこむことはそれほどなく、落ち着いている。夏休みに落ちた筋力について、自分で努力して取り戻そうと話すと、排泄等の場面で必死で自分で努力したり、やり方を変えてみるといったこともするようになった。運動会の取り組みでは、わかば学級の白組のリーダーになり、白組がわかば種目でどうしたら勝てるか病棟に帰ってからみんなで相談したり、練習したりすることも見られた。自分なりに考えて行動してみようという気持ちを認めていきたい。学習の中では、1学期と比べると苦手な教科でも自分なりに考えようとする姿勢が少しずつ見られるようになってきている。学習の見通しを持たせ、自分で考えたりやってみて「わかった!」という達成感が得られるように1時間1時間を大事にしていきたいと考える。

最近のN君の心の安定は、病状の安定に大きく影響されているがU教諭、Y教諭の見通しを持った指導による成果でもあろう。理科の学習で私のところへ来るN君の表情は次第に明るくなっている。かつての気難しくその日その日によって落ち込んだりする姿は殆ど見られなくなった。

## 12 U、Y教諭とN君の関わりから見えてくるもの

U教諭とY教諭との関わりからN君を眺めて、両教諭にとって、若年性リュウマチの痛みにより身体の触れ合いを伴う関わりを嫌うことや、病状の変化に伴う心理的な不安定さ、また、それらからくる人との関わりに対する消極さが、N君と関わる時の難しさを感じさせて来た。それぞれに異なって肢体に障害がある子ども達にとっては同じ経験を共有することは難しいことである。両教諭の関わり方の中からわかることは、予め指導者が先回りして条件を限定した関わり方を準備するというよりも、自らの障害の状況を知り、自分なりの方法を見つけ出し経験していくための支援が必要ということであろう。そうすることが障害と向き合い、自分らしい生き方を切り開いていくことにつながるのではないかと思う。また、そのためには、教師のストレートな思いを伝えることに加えて、十分な沈黙の時間が確保されることが必要であろう。両教諭とも指導の記録は特別な方法を用いているわけでもなく、毎日の関わりをただ書き留めているに過ぎない。しかしながら、N君の心の葛藤を感じつつ自分自身の心の葛藤やそれに伴う沈黙の時間の大切さを十分に記録として描き出している。自らの問題として、心の内面を、記録や日記を常に読み返しながらN君と接してきたことが、N君の心を動かし、開かせていったのではないかと感じている。